

少女Bは「アンナの成長についていけなかった。初めのまゝのアンナに今も最も近い自分を感じる。」という。

少女Cは「自分とそっくりの人としか話せなかったアンナが、違う人たちと微笑みあうことができるようになった時うれしかった。わたしもそうだった

から。私もこの一年であまり知らない人たちとも近づいて話してみたいと思うようになった。」という。

読み手の少女たちは、アンナと共に旋律を奏でる者として旅をした。少女たちの、この先、たゆとう旅は幾たりも遍路をめぐるに違いない。

(かっこう文庫主宰)

岸田 麗子著
『父 岸田 劉生』

(中公文庫)

皆川 美恵子



藍色のちぢみの浴衣を着て、赤まんまの花を手に持った麗子五歳の肖像——画家劉生の数多くの麗子像の端緒となった、童女麗子の画をカラー・カバーにした、『父 岸田劉生』が中公文庫に登場した時、私は、さっと手をのばし、宝物のように小本を掌中にした。原著は、昭和三十七年雪華社から、武者小路実篤の序に飾られて出版されている。さらには昭和五十四年に読売新聞社から復刊もされている。

麗子像とは、私にとって気にかかってならない子ども像である。もう何年前のことになるだろうか、竹橋の国立近代美術館で岸田劉生展が大がかりに開催され、画業を目のあたりにしてからというもの、劉生にとっての麗子は何であったのか、いつかゆっくり麗子について想いを馳せてみたいと、その神秘的な子ども像の謎ときを密かに憧れ続けてきた。麗子さん御自身による父の回想記は、そんな憧れを抱く私にとつて、とりのがすことのできない本として、私

の前にひょっこり現われてきたのだ。

麗子さんは、父のモデルとなった時の思い出をこう綴っている。

「父はモデルの時にはいつも気をつけて、『くたびれたらいうんだよ』といってくれる。そしてよく、くたびれたかい、と途中でもきいてくれる。くたびれていれば『うん』とうなずき、くたびれていなければ、『まだ大丈夫』という。あんまり長く坐っていて足が痛くなつて『お休み』になつたこともたびたびあった。

ある時やはり長くじっと坐っていて、もう足の痛さが我慢できなくなり、父の方を見た。画室の中は父の動かす筆の音が聞こえるかと思うほど静かだ。私は『もう足が痛いからお休みしたい』という言葉をのみ込んでしまう。私はじっと足の痛さをこらえている。すると涙が目には溢れてきて今にも頬をつたって落ちそうになる。涙が落ちたら父は気がつくだろう。子供心にも父の仕事の中

断させたくなかった。私は父に気づかれないようにソリーと上をむく。天井をにらんで溢れる涙がひっこむのを待つ。父はなおも一心不乱に着物の柄を描いている。

そのうちやっと父の仕事が一段落のところになり、お休みになる。父はよく私が泣くのが可愛いといつて、可愛想なお話をして泣かしたりして喜んでくれたが、こんな辛抱をして私が涙を隠したことは知らなかった。」

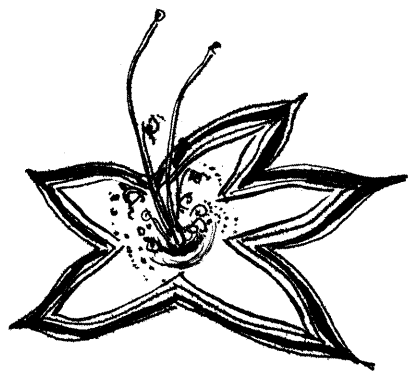
麗子像から受ける強烈な印象は首（こうべ）に、それも眼に際だつていよう。モナリザもひき合いに出来る麗子の微笑。その微笑をたたえた顔立ち、しかし、けなげな涙を隠し続けた子どもによって支えられていた。どうしてか麗子さんは、他にはモデルとして立ち続けた思い出を語ってくれてはいない。大部分は、父のつけていた日記をもとに、父の仕事の足跡をていねいに辿るということをおこなっている。

たとえば麗子像に関して、一九二〇年八月十一日の日記「……十二時から麗子の肖像にかかったがどうもむつかしくてよわった。無形の美、生きた感じをぢかに画布の上に弥が上にも露骨に出したい。美術の本領はこの無形の『美』にあつて物を如実に再現する方の仕事は客にある。写実はこの二つの最も有機的な合一にあるが、しかし美術には写実以上のものがなくてはならない。物に即した美の中に、或は上に宿る『深さ』『無形』である。……」を紹介する。

麗子の毛糸の肩掛け、あの赤いしぼりの着物。衣裳である毛糸やしぼりのしぼしぼの、もりあがる材質感の写実は目をうばわれるほどである。しかし、麗子の顔は、「一見して人をうつ」「深い力」に満ち、人をひきつけてやまない神秘をたたえていよう。古代エジプト人のような横向きの顔。細長く美しい、異界を見つめているかと思われる、ツタンカーメンのような眼（まなこ）。劉生は、あくことな

く麗子という子どもの顔を描き続けた。麗子は、芸術家である劉生がはらみ、生み出した子どもの形をした怪物であつたろう。

私にとって最も不可思議で、展覧会場でも長く立ちどまり続けたのは、『二人麗子飾髪図』であつた。ここでは、さらにもう一人の麗子が登場し、その麗子が手鏡をのぞきこむ麗子の髪を梳き、そのあと紐を結び、椿の髪飾をつけようとしている。白い足の、そのもう一人の麗子は、あきらかに妖怪めいており、二人の麗子は、もうこちらへ視線を向けて



はくれず、髪という奇怪な生命をもてあそびながら、異界でむつまじく華やいでいるばかりである。

『初期肉筆浮世絵』で「デロリとした美しさ」と至言を放った劉生の、その美しさを、私はこの二人麗子に感じ続けている。デロリとした女兒にうつしとられる麗子は、父によって、愛称デコちゃんと呼ばれていたことを知った。でどうしたと言われればそれまでだが、私はそのことを知って、この小本を読んだ醍醐味を密かに味わったのであつた。

(十文字学園女子短期大学)